

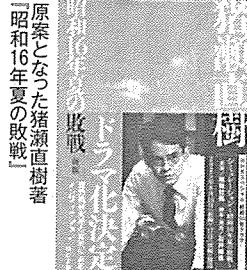
## 資料3-2

「シミュレーション」で描かれた  
総力戦研究所のメンバー(NHKホームページより)



# 終戦80年 NHKスペシャルは歴史の冒瀆だ

# 歴史の冒瀆だ



総力戦研究所所長の  
孫が怒りの告発

**飯村 豊**  
じい むらわ  
国際政治アナリスト



『シミュレーション』昭和16年夏の敗戦』というドラマが、八月十六、十七日の二夜、前後編としてNHKで放送されました。日米開戦直前の一九四一（昭和一六）年八月、総理大臣の直轄機関「総力戦研究所」が様々なシミュレーションの末に「日本必敗」という結論を得て、近衛文麿首相や東條英機陸相に報告したもののが採用されず、戦争に至った史実を元にしています。

この総力戦研究所の初代所長を務め、日米戦争のシミュレーションを行なったのは、私の祖父で陸軍中将だった飯村穰（一八八八～一九七六）です。ところがこのドラマで祖父は、シミュレーションに必要不可欠な自由闊達な議論を妨げ、結論を捻じ曲げようとする卑劣な人間として登場します。

私は放送前から、NHKと話し合

いを重ねてきました。祖父の描かれ方があつたのは、NHKのホームページを開いてみると、このドラマの七月十六日付けの告知が出ていたのです。月には陸海軍、各省、民間企業、銀行などから若手のエリート三十六名が研究生として選ばれた。平均年齢は三十三歳。軍事力だけ

方が事実と正反対であることに抗議し、戦争の記憶が薄れていく中で史実が歪曲されて広まってしまうことを恐れて、修正を求めたのです。

でなく、政治、経済、文化など国

のあらゆる力を結集して遂行される総力戦について調査研究を行なつた。一九四一（昭和一六）年七月から、メンバーがそれぞれの専門分野を活かした模擬内閣を組織して、閣僚や日本銀行総裁などの役割を担い、軍事、外交、経済、思想など各分野の機密情報を元に、日米開戦を想定した机上演習を実施した。その結論は「国力差が大きすぎ、日本は必ず負ける。戦争は回避すべし」。しかし、その報告は政府や軍部の政策に反映されず、日本は戦争へ突き進んでいく。

飯村豊氏（78）は、インドネシアやフランスで特命全権大使を務めた元外交官。外務省官房長時代には、田中眞紀子大臣と対峙したことで知られる。

## “最大の壁”とされていた

NHKが総力戦研究所を舞台としたドラマを作っていたことは、七月までまったく知らなかつたのです。が、実はNHK関係のプロダクションの方から戦後八十年を迎えるのを機にNHKスペシャルの番組として総力戦研究所についてのドキュメンタリーを作りたいと考えているとい

う相談を受け、六月末から三度ほど、我が家で取材に応じました。丁度最後の取材が終わつた頃、七月下旬に別の方から「ドキュメンタリーではない番組が流されるようだ」というお話を聞きました。急な話に驚

いたくらだいどう  
陸軍少将。総力戦研究所の所長。

所長としてこの研究を推進したのが、飯村穰・陸軍中将だ。のちに南方軍総参謀長としてレイテ島決戦で指揮を執り、東京防衛軍司令官として終戦を迎えている。その孫で国際政治アナリストの

飯村穰に關しては、本が何冊か出

ています。総力戦研究所メンバーのOBの会があつて、もう皆さん亡くなっていますけれども、ご存命時の手記や証言も残されています。それらのどこにも、『最大の壁』だったという趣旨の記述はありません。猪瀬さんの本を原案にしたと言うのなら、NHKの制作陣も脚本・編集・演出の石井裕也氏も、細部まで読み込んだはずです。この本には、模擬内閣で大蔵大臣役を担当した今泉兼寛さん（当時、大蔵省主税局事務官）の〈演習中、模擬内閣の結論を押さえ込もうという素振りが飯村所長になかった〉という証言も引かれています。

模擬内閣の首相役に選ばれた若者を主人公に据え、頑迷で姑息な軍人の上司を敵役に配すれば、ストーリーは盛り上げやすいし視聴率も取りやすいと考えたのでしょうか。ありきたりすぎる発想です。

もいきません。

見終えた感想は、やはり「全然違う」。察じた以上に、祖父は姑息で卑劣な軍人として描かれていました。模擬内閣の首相役の若きエリートをこつそり呼びつけ、「不都合な報告は上に上げられない。意味はわかるな。空気に逆らつてもいいことはない」と恫喝して自由な議論を妨げるだけでなく、所長に盾突いた模擬内閣の企画院次長役に赤紙を出して、他のメンバーへの見せしめとしたり、首相役の弟に赤紙を出して家族まで追い詰めたりする。しかし若者たちは圧力に負けず、志を貫きました——という主役と敵役のはつきりした、通り一遍の作劇ですが、祖父はそんな卑劣漢ではありません。現実の総力戦研究所は「飯村塾」と呼ばれるほど、若いメンバーたちからわれていました。

(177)

これはきちんと話をしなければ

考へてNHKに連絡を入れ、親族としては受け入れがたいと伝えました。すると七月二十五日、NHKスペシャルの制作担当の方二名とNHKエンタープライズの担当者が押つ

取り刀で我が家へ来られ、交渉が始まりました。

### 全然違う

昭和天皇が登場し、近衛文麿や東條英機、軍務局長の武藤章まで実名なのに、なぜ総力戦研究所の関係者だけ仮名なのか。NHKは、こうしておけば、いくらでも作り話を盛り込めるだろうと考えたのでしょうか。「それはあなたたち、頭隠して尻隠さずですよ」

と申しました。総力戦研究所の初代所長と言えば歴史上、飯村穰しかいないからです。ですから、こう提

案しました。

「総力戦研究所という実在の名前を使わずに、国策研究所とか架空の名稱にしたら、あなたたちは自由になれるんじゃないですか」

しかし聞く耳はもつてくれませんでした。史実の重みに乗つかってエンターテインメントを作りたいという考えは、譲れなかつたのでしょう。しかし、それが大きな間違いなのです。舞台装置だけを猪瀬さんの本から借り、猪瀬さんの名前も利用しようという狙いだったのではないでしょうが、なぜ総力戦研究所の関係者だけ仮名なのか。NHKは、こうしておけば、いくらでも作り話を盛り込めるだろうと考えたのでしょうか。「それはあなたたち、頭隠して尻隠さずですよ」

私は「ピントのぼけた申し入れをしていたら申し訳ないので、脚本か映像を事前に見せて欲しい」とも頼みました。「それは出来ない」という返答でしたから、ドラマの詳細な内容は放送を見て初めて知りました。不愉快になるとわかつていたので、見たくなかったのですが、そう

### 的中した未来予想

あげくの果てにドラマの中の所長は、机上演習の議論が開戦回避へ傾くと、

「面倒に巻き込まれるのは勘弁だぞ」と部下に言い残し、責任を投げ出してしまうのです。名優の國村隼さんが嫌味たっぷりに演じたため、座つていてるだけで卑劣な人間に見えてくるほどでした。

祖父が総力戦研究所の創設や日本戦の机上演習で果たした役割やアメリカとの戦争に慎重だった姿勢など

の発案で作られ、各省や民間会社から推薦されたメンバーには、口頭試問が課されました。余談ですが、このとき考へ出されたのが、現在も広く使われている「面接」という言葉です。

「日本必敗」の研究結果は、一九四一年八月二十七日と二十八日、首相官邸の大広間で居並ぶ閣僚と統帥部関係者を前に報告されました。

大きなポイントは、南方進出の目的だった石油確保に成功しても、それを輸送する船を次第に失っていくという見通しです。年間に百二十万トンの船舶を撃沈されるが、造船能力はその半分の六十万トンにとどまる

と試算したのです。

また、四一年当時は勢力範囲を広

げていた同盟国のドイツが、劣勢になつて敗北すること。その後、アメリカとの接近によって、ソ連が中立条約を破つて参戦してくること。本土全体が空襲によって多大な被害を受け、国内の経済と食糧事情が悪化すること。それぞれの時期や規模など、予測は具体的で多岐にわたりました。四一年八月開戦のシミュレークションの結果、互角に戦えるのは最初の二年のみ。四年後には国力が尽き、対ソ開戦の決断を迫られた模擬内閣が総辞職するところで、机上演習は終わっています。現実の戦局は、真珠湾攻撃と原爆投下を除くすべてが、この通りに進みました。

東條陸相は研究所の設立に尽力し、机上演習を毎日のように見学に来て熱心にメモを取っていたそうです。東條陸相が何を考えていたのか分からまんが、首相官邸の報告会で日本必敗の結論を聞かされた東條

そのことを私があらためて認識したのは、ごく最近、昨年の夏です。祖父の書類を整理しているときに、表紙裏に「豊において保存せらるべき昭和四十八年」と記された回顧録『現代の防衛と政略』を再読したのです。そこには、こう書かれていました。

（私の欧米課長当時、わが国には、海軍軍縮問題に基因して、米国と戦うべしとの意見が、盛んに行なわれた。私は日米戦争を口にする人々が、米国と戦ったならば、どうなるかを真剣に考えているのかを疑い、（中略）図上戦術を行なつた）

結果をまとめた報告書は、三部だけ作られたそうです。一部は参謀本部に保管し、一部は陸軍士官学校同期で一九三五（昭和一〇）年に作戦課長に着任した石原莞爾大佐に渡し、もう一部は手元に置いたのですが、終戦後アメリカ軍の手に渡らな

陸相は、

「このたびの机上演習について、研究に関する諸君の努力は多とするが、これはあくまで演習と研究であるが、実際の作戦とは全く異なることを銘記しておいてもらいたい」と述べ、日露戦争の勝利を引き合いで出して「戦というものは、計画通りにいかない」と語つたそうです。

終戦後、GHQは「総力戦研究所は戦争準備のための共同謀議の企画立案をした機関ではないか」と疑いをかけ、極東国際軍事裁判のための調査の対象として取り上げられました。祖父はそのとき次のように証言しました。祖父は戦後刊行した『現代の防衛と政略』という回顧録に書いています。

「私が昭和十六年八月に主宰した兵棋演習に於て結局日本は敗れるとの結論が出たが、政府はこれを採択せず、大東亜戦争に突入して今日の

いように焼却したことです。私は残る二部を捜していますが、まだ見つけられません。

したがつて演習結果の詳細はわからないのですが、祖父は回顧録にその目的を「要是主手のない敵との戦争がいかに困難であるかを知つてもらうため」と書いています。「主手のない」とは、日本はアメリカを戦争で屈服させるだけの決め手を持つていない、ということです。軍内で高まっていた日米戦争も辞さずという意見を鎮めるためにこの机上演習が行なわれたことは間違いないでしょう。

総力戦研究所での机上演習より七年も前に祖父は対米開戦の無謀さを悟つていたわけです。その認識は、軍の首脳部や政府にも共有されていました。軍部のすべてが戦争に向かつて突き進んでいたわけではないことを、歴史に留める必要があると思います。

敗戦を招いた。幸いにもこの演習の記録はアナタ方の手に渡った。これを読めば私の述べたことは一目瞭然である。もしこの研究所が企画立案の機関であつたらおそらく政府の戦争突入を防止し得たであろう」と述べた。

（中略）その演習経過が余りにも大東亜戦争の推移と酷似していたために私は意外にもGHQより敬意を表せられ、戦犯などはもちろん問題にならなかつたのである

### 幻の机上演習

実は祖父は陸軍参謀本部で欧米課長を務めていた一九三四（昭和九）年にも、同じような机上演習を行なっています。総力戦研究所の机上演習には民間人も入っていましたが、こちらは陸軍の情報部門を中心に參謀本部内で極秘に進められました。

話をドラマの放映前に行つたNHKとの交渉に戻しましょう。その際、NHKの皆さんに、「どういう根拠で、祖父の人物像を変えたんですか。一次史料はあるんですけど」

と尋ねても、何の返事もありませんでした。ドラマはすべて彼らの空想の産物なのです。

私は二人の弁護士にも相談しながら、交渉を進めました。最初に、「史実と大いに違つてるので、内容を修正してください」と申し入れたのですが、

「もう出来上がつてしまつてるので、修正はできません」

とのお返事でした。京都の太秦でセットを組んで撮影したそうですが、もう壊してしまつたので撮り直

しはできないというのです。

「では次善の策として、第一に、これはノンフィクションではなくフィクションだと明らかにしてほしい。

番組の最初に『内容も人物像もフィクションです』と最低十五秒間はテロップを流して、視聴者の印象に残るようにしてほしい。

第二に、番組のHPを修正してほしい。三番目に、私の言い分を番組で流してほしい」と申し入れました。ドラマに続く十分ほどドキュメンタリーパートは初めから作る予定だったようなので、その中に私の主張を入れてほしいという依頼です。さらに、「冒頭のテロップで『ドキュメンタリーパートで史実を語ります』と告知してほしい。ドラマ部分が終わつた途端に視聴者の方々がテレビを消さないように、ただちにドキュメンタリーパートに入つてほしい」

は異なる人物です。飯村所長は研究所の設立と運営に尽力し、アメリカと戦争した場合の先行きを予測する機上演習(シミュレーション)の実施を決め、メンバーに組織の壁を越えた自由闊達な議論を奨励しました。導き出された“日本必敗”的結論は、近衛文麿首相、東條英機陸相らに報告されました。それが国家戦略に反映されることなく、日本は開戦へと踏み切る事になりました。

こうした配慮はそれなりに評価しますが、ドラマそのものが変わらないでは、小手先の対応と言うほかありません。

### 歴史をエンタメ化していいのか

やりとりの途中、担当者の方からチラッと「映画化を検討しています」という話が出て、そのとき初めてドラマが映画化される予定がある

と細かく注文をつけました。

### 小手先だったNHKの対応

このドラマについて私がNHKに申し立てたい抗議には、二つの主旨があります。第一は自らの祖父について、遺族として感じる名誉毀損です。第二は、歴史の伝え方の問題です。このドラマはNHKスペシャルで放送されました。日本で最も権威あるドキュメンタリーとして、周知されている番組です。それがどのようなエンタメドラマを流し、史実を歪めていいのか。歴史を描くとき、越えてはならない一線があるのではないか。私は戦後八十年を迎えた、これから日本にとって、この第二の主旨がとりわけ重要だと考えていました。

NHKの方々との交渉は、四、五回に及びました。態度は真摯で、三

点の申し入れについてはそれなりに努力してくれ、番組に反映されました。その結果は皮肉なものでした。ご覧になった方は「いつたいこのドラマは何なんだ。史実なのかフィクションなのか」と混乱されたのではないかと思います。

番組HPにおける役柄の紹介からは“最大の壁”という文章が削除され、番組冒頭に次のようなテロップが付け加えられました。

「これは「昭和16年夏の敗戦」(猪瀬直樹著)を原案に創作を加えたドラマです。総力戦研究所の所長および関係者はフィクションとして描かれています。ドラマに続き番組後半に総力戦研究所の史実を伝えるドキュメンタリーがあります」

HPには、こんな言い訳もついています。

〈当時、総力戦研究所の所長だった飯村穰陸軍中将は、ドラマの所長と

構)に申し立てをする考えも、NHKに伝えました。祖父への人権侵害と、公共放送が歴史を歪曲する番組を作るのは間違っているという放送倫理上の問題の二本立てで、進めるつもりです。

戦争の当事者や関係者や私のような遺族がいなくなつてからこのようなドラマを作れば、NHKは誰からも批判されず、どのような検証も受けなかつたかもしれません。でも、むしろそのほうが恐ろしい。

戦争や国の歴史を、どうやって語り伝えていくか。このことは、時が経つにつれて大きなテーマになつてきます。歴史を軽々しくエンタメ化していいはずがありません。その線引きはどこか。史実の歪曲をどうやって防げばいいのか。国民全体の意識を高め、議論する必要がありまます。戦後八十年のいま、私の小さなアクションが役立つなら幸いです。